The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	教育老年学の構想 : エイジングと生涯学習
Author(s)	堀, 薫夫
Citation	大阪大学, 2001, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3188021
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【18】

氏　　名	堀（ほり）　薫（しげ）夫（お）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学 位 記 番 号	第　16401　号
学位授与年月日	平成13年3月29日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学 位 論 文 名	**教育老年学の構想－エイジングと生涯学習－**
論 文 審 査 委 員	（主査） 教　授　池田　寛 （副査） 教　授　友田　泰正　　教　授　平沢　安政

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、欧米で示されたエイジングと生涯学習の関連に関する理論や議論を、筆者の構想する教育老年学の枠組みのもとに整理・咀嚼しなおし、そこで示された論点を、実証的な調査研究の俎上に乗せ、生涯学習および高齢者教育への示唆を得ようと試みたものである。

本論文の章構成は以下の通りである。

第1章　教育老年学の構想
第2章　エイジングと社会
第3章　高齢者の特性を活かした学習援助の視点
第4章　人びとのエイジングへの意識：エイジングに関する調査データの分析を中心に
第5章　エイジングと学習能力・学習行動の関連：希望する学習スタイルの変化の問題を中心に
第6章　高齢者への学習援助に関する調査研究
第7章　教育老年学の展望：今後の課題と可能性
参考文献一覧

第1章　教育老年学の構想

本章では、欧米における教育老年学の展開過程とそこに付随する課題を述べた。1970年代にアメリカで誕生したとされるこの学問分野は、独自の発展過程をたどった。ここでは、まずアメリカにおける論としてピーターソン、ムーディ、マクラスキーらの論を検討した。次いでイギリスにおける例としてグレンデニングの説の検討を行い、批判的教育老年学の視点を示した。さらに、ジェロゴジー（高齢者教育学）という同種の学問的枠組みの検討のあとで、欧米における教育老年学の構想の限界点を指摘し、以下のような筆者自身が構想する教育老年学の枠組みを提示した。

Ⅰ　エイジング教育の基礎科学
　1　エイジング・プロセスの研究
　2　エイジングと学習能力・学習行動との関連の研究
　3　高齢者の学習の成立条件の研究

Ⅱ　エイジング教育の実践論

1　高齢者の特性を活かした学習援助論の研究

2　一般市民に対するエイジング教育の研究

3　高齢者に関わる専門職教育の研究

4　学校教育におけるエイジング教育の研究

基礎科学のうち、1が本論文の第4章に、2が第5章に、3が第6章に、それぞれ対応するといえる。

第2章　エイジングと社会

本章では、教育老年学のキー概念である「エイジング」概念を、社会的文脈との絡みのなかで解きほぐす理論的試みを行った。第1節では、エイジングそのもの定義の検討、第2節ではエイジングと発達との関連を検討し、第3節では、社会学という学問分野でこの概念がどう扱われてきたのかの分析を行った。その結果、機能主義的な社会学・老年学との対話は一定程度行われているものの、他のアプローチとの対話も必要であるという結論に至り、最後にマーシャルとティンデイルが提起するラディカル・ジェロントロジーの視座を提起した。さらに第4節では、エイジングをポジティヴな概念としてとらえる議論を概観し、この方向の新しいエイジング観を提起した。

第3章　高齢者の特性を活かした学習援助の視点

この章では、エイジング現象が顕著にうかがわれる高齢期に焦点を当て、この時期の者に対する学習援助の理論的示唆をまとめた。具体的には、①ジェロゴジー論、②経験・対話・超越からの教育の視点（ムーディ）、③マージン理論と高齢者特有のニーズの問題（マクラスキー）、④ライフレヴューの教育的意味、⑤高齢者教育における人間関係の問題、⑥高齢者教育の継続性理論（アチュリー）という論点である。これらを考察したあとで、理論的示唆の整理を行っている。

第4章　人びとのエイジングへの意識：エイジングに関する調査データの分析を中心に

本章以下では、これまでの理論的検討をふまえ、教育老年学における実証的な調査研究の結果を報告する。第4章では、エイジング概念に対する人びとの意識を、主として高齢者と大学生の意識構造の比較という点を軸に分析した。第1節では、エイジング概念を「年をとること」と「老い」とに便宜上分けて、意識調査結果の分析を行なった。その結果、高齢者と大学生とではエイジングへの意識構造にちがいがみられること、とくに高齢者はこの現象をしぜんでポジティヴな概念としてみる傾向がつよいことが示された。さらに高齢者の社会階層との関連では、社会階層が高いと判断される層にエイジングへのネガティヴな意識構造と近い位置にあることが示された。

第2節では、エイジング・クイズを用いて、高齢者と大学生のエイジングに対するバイアスのちがいを検討した。大学生のほうがとくに心理的・社会状況的項目で誤答率が高いこと、またエイジング・ステレオタイプの形成過程が両者で異なっていることを示した。

第3節では、予期される人生の予定表に関する高齢者と大学生の意識構造の比較を行った。その結果、高齢者は人生上の出来事の多くが人生の後半部に生起すると感じる傾向にあること、またそこに男女差があることなどが明らかとなった。

以上の3つのエイジング意識調査の結果をふまえ、高齢者と若年者との間にはいくつかの差があることがまとめられた。

第5章　エイジングと学習能力・学習行動の関連

本章では、教育老年学の第二の柱である、エイジングと学習能力・学習行動の関連に関する調査研究の結果を報告している。

第1節では、ウェクスラー成人知能検査を用いて、高齢者と大学生との知能の構造の対比を行い、高齢者が言語的知力に長けていること、ジェンダー・バイアスが存在すること、60代と70代で動作性知力に差があることを示した。

第2節では、2つの地域の生涯学習基本調査データから、成人の希望する学習スタイルの構造を年齢層ごとに比較

し、2つの地域で似たようなパターンのもとに学習スタイルの変化があること、高齢になるほどそれまで行ってきた学習方法を以降も希望する傾向が強くなることを示した。

第6章　高齢者への学習援助に関する調査研究

本章では、教育老年学第三の柱である高齢者への学習援助に関する研究を、2つの地域の老人大学受講者への意識調査から行った。その結果、老人大学での学びが高齢期における人間関係の再構築と関連があること、老人大学受講への積極的な姿勢がポジティヴな評価と関連があることが明らかになった。

第7章　教育老年学の展望：今後の課題と可能性

この章では、これまでの章でふれられなかった問題を、とくに異世代交流の意義という点に限定してその理論的示唆を整理した。次いで、今後の教育老年学研究上の課題を、「福祉と教育の視点の共通点と相違点」「高齢者教育と成人教育の関連」「ナラティヴ・ジェロントロジーの可能性」の3点から検討した。

論文審査の結果の要旨

本論文は、前半部で欧米で展開されたエイジングと生涯学習の関連に関する理論を、教育老年学の構想のもとに整理し、後半ではそこで示された論点を実証的な調査研究の俎上に乗せ、生涯学習および高齢者教育への示唆を得ようとしたものである。

1970年代以降主としてアメリカ、イギリスで展開されたエイジングや高齢者の学習能力に関する広範な研究を丹念に読みこなし、それらを独自の枠組みに組み立て直して教育老年学の構想を打ち出した意欲的な研究である。この理論的探究にもとづいて、後半は調査研究により実証的裏づけを行なっている。ただ、調査研究部分のデータは質問紙調査によっており、それが理論編の部分の制約－例えばシンボリック・インタラクショニズムなどの成果が取り入れられていないことなど－につながっている。

公聴会において、論文内容及び理論と調査との整合性等について、審査委員をはじめ質問や意見が出されたが、それらにも適切に応答し申請者の豊かな知見に裏づけられていることが確認された。

以上のことから判断して、本論文は博士（人間科学）の学位の授与に十分に値するものであると判定する。